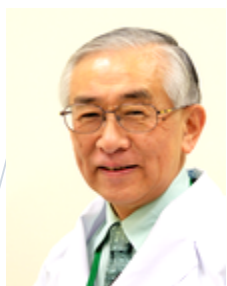


# 東都文京 だより

2022年7月1日 第30号

発行：医療法人社団大坪会  
東都文京病院広報委員会  
〒113-0034  
東京都文京区湯島3-5-7  
TEL: 03-3831-2181

## —東都文京病院2022年の夏—



関東の梅雨入りは平年より早く6月6日ごろから2週間ほど断続的にじめじめした日が続きましたが、梅雨明けにならないうちに猛暑がやってきました。6月25日は東京も猛暑日となり、群馬の伊勢崎では6月での観測史上初の40度超を記録しました。地球温暖化の影響は加速しており、国際協調による地球規模の早期対応が必須です。しかし一方、エネルギー資源大国ロシアによるウクライナ侵略は4か月以上続いており、1日も早い停戦が切望されます。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、オミクロン株の急拡大による第6波が3月21日の「まん延防止措置」解除後も収束せず、5月連休後にリバウンド現象が見られ、その後まだ下がりきらずに変動しています。東都文京病院でも、6月3日に院内集団感染（患者さん1名・スタッフ5名）が発生し、6月3日より6月13日まで入院制限を行うとともに徹底した感染対策を実施いたしました。地域の皆様のご協力により感染の更なる拡大を防ぐことができましたこと、感謝申し上げます。

東都文京病院は、窪田敬一新院長の就任を契機に、院内感染防止対策と医療事故予防対策の体制を見直し、関連委員会活動を更に活性化して医療の質の向上に努めます。また、窪田院長には、独協医大の肝・胆・膵外科で難しい腫瘍の外科治療を多く手掛けられた実績があり、当院外科領域の活性化が期待されます。さらに、地域医療ネットワークの中で、二次医療機関として急性期から回復期・慢性期に幅広く対応し、周産期・小児医療から健康長寿の延伸を目指す健診まで「小回りの利く総合病院」として、地域皆様の健康を守ります。

猛暑の夏が危惧される折、熱中症予防としてこまめな水分補給と共に、マスク装着では、適切な着脱に気を配り、日常生活でのCOVID-19感染対策をご継続いただきますようお願い申し上げます。

2022年7月1日

東都文京病院統括院長 杉本 充弘

## ～新型コロナについて～



この原稿を書いている6月上旬、東京都の新型コロナの新規発生は減少し続けているところです。残念ながら当院で初めての院内感染が起きてしまいました。患者さんの感染は1名にとどまり、幸い症状の悪化はなかったのですが、改めて医療機関における感染対策徹底の必要性を感じています。

さて、当院の新型コロナ患者の入院はこの2年で800名を超えました。当初は未知の感染症で治療薬もなく、また変異株によってこんなにも症状や経過が異なるということも予測されていませんでした。様々な専門家の情報を集め、地域の病院として、当院では何ができるかを、内科とICT（感染症コントロールチーム）の医師が中心となって考え、看護師や他科の医師、放射線科技師、検査技師、薬剤師、事務員などと協働しながら、発熱外来、新型コロナ病棟の運営を行ってきました。4階病棟を一部閉鎖し、レッドゾーンを決めて、2020年6月に初めての入院を受け入れられました。

初めの頃は隔離のための入院が多く、文京区や台東区からの依頼が中心でした。若くて入院が初めての方、不本意な入院の方も少なくなく、お酒を持ち込んだり、病室で喫煙したり、不満が強い方もいらして、スタッフが疲弊することもありました。大病院の複数の先生方も当時そのような話をされていたので、どこも同様だったようです。保健所はもっと大変だろうと思われました。

2020年11月頃より酸素が必要となる方が増えていきました。来院したら呼吸状態が非常に悪く、すぐに大学病院に救急搬送して人工呼吸器管理となった方もいらっしゃいました。当院は中等症Ⅱまでの対応病院で人工呼吸器管理は困難であるため、重症化が疑われた場合は近隣の大学病院等をお願いしていたのですが、東京医科歯科大学病院、東大病院、日本医科大学付属病院の各救急部を中心に、転院を受けて頂き、落ち着かれたら当院に戻って治療継続することもありました。最新の治療を行えるよう常に情報を更新し、また大病院での治療から学び、2021年4-5月の第4波後にはベクルリーやネーザルハイフローといった治療も取り入れ、人工呼吸器管理以外の当時の治療はほぼ可能な体制としていました。

2021年8月の第5波では、重症化率が高いデルタ株が主でワクチン接種も半ば、治療は酸素が必要になったら抗ウイルス薬とステロイド等しかありませんでした。高熱になって死ぬかもとパニックになって救急車を呼ぶ方や、ぎりぎりまで我慢して呼吸状態が悪化して呼ぶ方まで様々でしたが、重症ベッドが目詰まりして、当院で重症化して転院依頼をしても東京中に受け入れ先がない状態でした。救急隊や東京都調整本部からの依頼もひっきりなしで、当院でどこまで診られるか、相談しながらぎりぎりの判断を行いました。当院の入院も半数以上が酸素を必要とし、3台に増やしたネーザルハイフローはフル回転でした。

その後、抗体薬や経口の抗ウイルス薬が次々に使用可能となり、ワクチンがいきわたり、オミクロン株で重症化率が下がったことなどから、強い緊張状態は解けています。

しかし、高齢者や持病のある方にとって脅威になりうることは変わらず、医療機関として引き続き気をつけてまいります。今後も地域で必要とされる医療に向き合っていきたいと考えています。

東都文京病院  
内科 建石 綾子

病院ホームページURLはこちら

<https://www.tohtobunkyo-hp.com/>

お気づきの点などございましたら、広報委員会まで  
お知らせいただきますようお願いいたします。